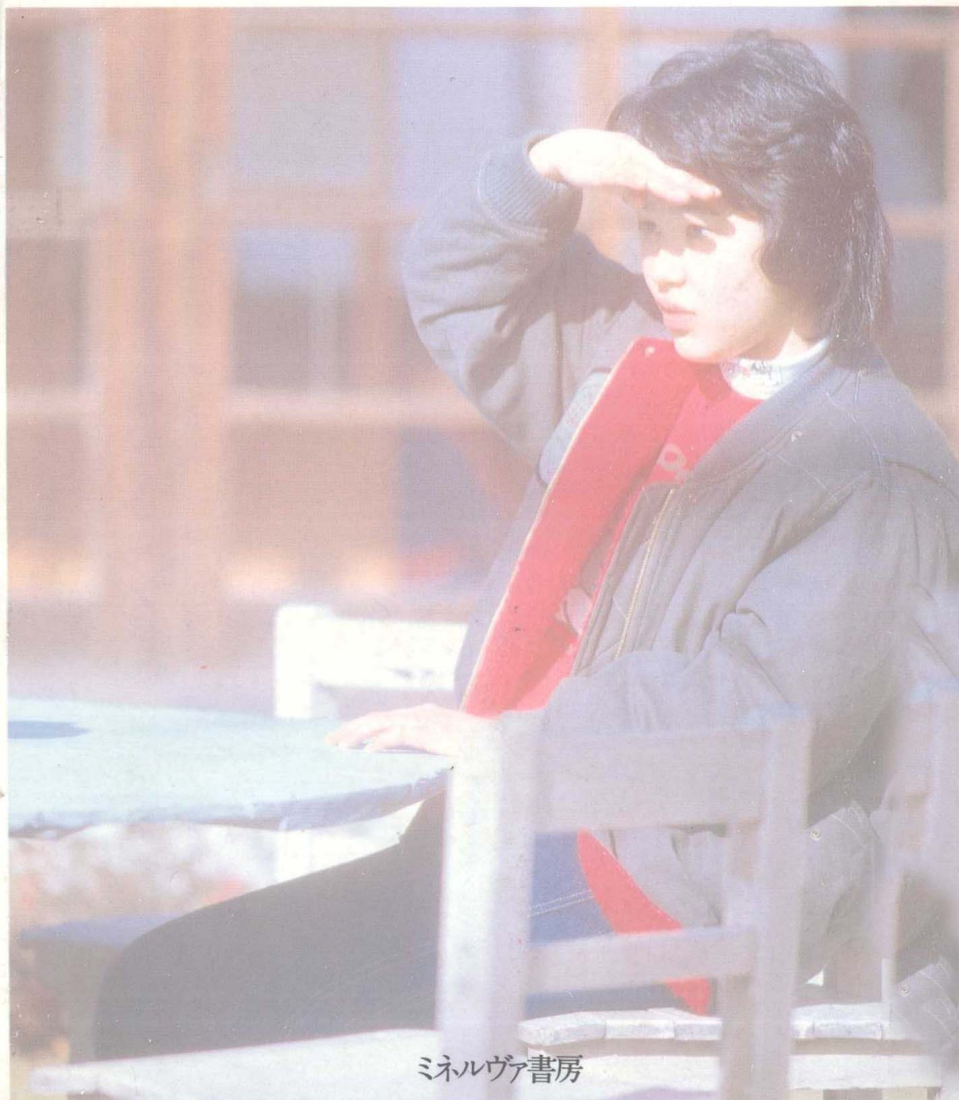


とまどい

登校拒否を克服した少女の日記

和田佳代子



ミネルヴァ書房

《著者紹介》

和田 佳代子(わだ かよこ)

1966年生れ。

現在 見習看護婦として医院勤務。

辻 光文

1930年生れ。

現在 大阪市立阿武山学園副園長

住所 高槻市奈佐原956

辻 須重子

1930年生れ。

現在 大阪市立阿武山学園保母

とまどい

1984年2月15日 第1版第1刷発行

1984年3月15日 第1版第2刷発行

定 価 1000円

著 者 和 田 佳代子

辻 光 文

発 行 者 杉 田 信 夫

印 刷 者 田 中 直 明

発行所 株式 会社 ミネルヴァ書房

607 京都市山科区日ノ岡塚谷町1

電 話 (075) 581-5191 (代表)

振 替 口 座・京都 2-8028番

© 辻 光文, 1984.

文功社・清水製本

ISBN 4-623-01512-2

Printed in Japan

佳代ちゃんのこと

阿武山学園教護係
辻

光
文

若山牧水の歌に

白鳥は 哀しからずや

空の青 海の青にも 染まず漂う

というのがあります。私は和田佳代子さん（以下佳代ちゃんと呼ぶ）のことを憶うとき、いつもきつとこの歌を思い出します。

佳代ちゃんは小学校五年・六年と丸々二年の歳月を頑なに登校を拒否し続けた少女でした。誰のどんな説得にも応ぜず、街の銭湯へすら行くことをしませんでした。母が心配のあまり買ってきた盥で湯浴みする佳代ちゃんが唯一慰められたのは猿の「花子」でした。

やがて民生委員の通告で児童相談所の先生がやって来て、一時保護所への入所を要請しましたがきき入れません。それでも担当ワーカーの市山先生や心理判定員の出井先生によるたびたびの家庭訪問で、ようやく佳代ちゃんは中学校一年に入学する日を機会に、教護院と名づけられた私どもの児童福祉施設に連れて来られたのです。

教護院というのは児童福祉法の四十四条に「不良行為をなし、又はなす虞れのある児童を入院させて、これを教護することを目的とする」と規定されている施設です。子どもにとって「不良」とか「不良をなす虞れがある」という言葉は哀しい深刻なものです。が、ともかくこれが佳代ちゃんと私どもとの出会いとなりました。

大阪北摂の美しい緑の丘陵に約三万坪の敷地を擁して池あり小川あり木立ちありして、赤い屋根の

点在する阿武山学園は昭和三十五年に大阪市が開設した施設です。学校と生活の機能を合せもった施設ですから、もちろん格子も塀も一切ない、きわめて開放的な雰囲気です。大体常時二十数名の職員と九十数名の子どもたちがいます。平屋の寮舎が八棟あり、一つの寮舎に小・中学生を合わせておおよそ十二名の子どもたちと家族ぐるみの夫婦の職員が生活しています。これを「小舎夫婦制」と呼んでいます。それはまた大勢の先生たちによって支えられながら運営されているのです。

佳代ちゃんはこちらで一日一日を精一杯、悲喜こもごもに三年の月日を過ごしました。

来た頃は尻っぱり腰の弱々しい少女でした。両親は離婚、再婚等の複雑な家庭生活を繰り返していました。そんな中で幼少時より弟と共にしばしばよそへ預けられたこともあり、悲しいさびしい中で育ったのです。けれども子どもらしいナイーブな痛々しいほどの豊かな感受性はまだ失われていませんでした。

その佳代ちゃんが徐々に心性の豊かさに、たくましさを加え真の自己を回復していったのです。

ここにくる子どもたちは、ほとんどがシンナーや不純異性交遊、家出、浮浪などの経験をもっています。そしてそのことを克服する機会、それは学校の先生や、家庭の父母が与えるべきものでしょうが、を見失ったまま何回かの補導の後に措置されてきます。

最近是人間の悩みを悩み抜けない子ども、そしてそれを短絡的に逃避したり、ともすればグループの中でごまかしてしまったりする傾向の子どもが確実に増えています。

悩むことは苦しいことですが小さな一つ一つの人間の悩みを超えることなしに人生は乗り切れない

でしょう。佳代ちゃんは悩みを真向から受けて立てるようになりました。悩みはその人自身におけるいのちであり成長の糧ともいえます。その人の背負う人生の悩みは、援助は受けられても究極的には他によって超えられる性質のものではありません。

佳代ちゃんは底知れぬほどの優しい心情でみんなと仲よく暮しながらも決して同じ^くませんでした。他にかけてがえのないたった一人の自分、他人は自分ではない、自分のいのちは自分が生きるんだ、ということが少しわかるようになったからです。

「自分を愛せない人はエゴイストだ」(W・トロビッシュ)というその自分。このことは非常に大事なことです。かつて沢木興道という禅僧はこのことに深い意味をこめて「一人おるとそれほどなもののに、グループができるとそこに麻痺状態が発生し、人間すっかりバカになって、よいか悪いかわからなくなってしまう。グループぼけするのである……」(宿なし法句参)と言っておられますが、佳代ちゃんはグループぼけして自分を安易な安心感に浸らせることはしませんでした。いつも徹底した誠を尽し静かに澄んだ自己に生きる努力をしていたような気がします。

だから苦しい悲しいやり切れない思いの日もきつと多かったと思うのです。私どもがそんな佳代ちゃんにどれほどの適切な助言やかかわりをもったかは、本当はわかりません。いくつになっても人間は心もとないものですし、そしてその答えは私どもが私どもの世を生きぬき、佳代ちゃんが佳代ちゃんの世を生きぬいてしまうまでわからないでしょう。

一人の子どもが如何にして自己変革を遂げるものでしょうか。如何にしてその生涯に人間の真実を

知るに至るものでしょうか。お読みいただければわかりますがいろいろな子どもたちが一人ひとり、よくも悪くも他にかけがえのない人間の真実をあらわして、人間とは何かを教えて尽きません。そしてまた学園の先生たちとはもとより沢山の方々の陰に陽にさりげなくふり注いで下せる力・愛情によるものとしみじみとありがたく思うのです。

この悠久な時の流れの中で、わずかばかりの限られた命を、今こうして生きる自分とは一体なんであるのか。他人の評価がやたら気になり、点数になった自分を本来の自分であると思ったり、チツボケな比較の世界にしか生きられない子どもは、この自分を知らないのです。頭は自分ではありません。自分の一部です。だから頭だけでどんなに考えてもそれが頭である限り堂々巡りに終り心の安定には決してなりません。

佳代ちゃんは学園で人間の真実の生き方を実際に学んだのでした。

阿武山学園の子どもたちは、レットルに等しい法の規定によって理由づけられて来た子どもたちばかりです。

しかしその真実の姿はみんな一人ひとり限りなく孤独で淋しく、そうした中で遂に本当の自己というものを見失ってしまった子どもたちばかりだ、というのがこの二十余年たくさんの子どもの子どもたちと生活を共にして得た私どもの偽らざる感懐なのです。

佳代ちゃんは、白鳥のように染まらない自己に生きた子どもの一人でした。それは哀しいほどにけなげな生活でした。

佳代ちゃんは今十七歳を過ぎ、看護婦見習いとして生きいきと働きながら暮しています。

この日記はこんな形で公開を意図して記したものではありません。一日一日を他にかけがえのないたった一度きりのお互いのいのちを生きる全生活の場で私ども夫婦と交した哀歓の軌跡に過ぎません。私どもの手もとにはこのような大学ノートが、すでに二百数十冊もたまっています。成人したり、結婚したりの機会に彼女たちに返したノートも何冊もあります。もう整理して焼こうかなと考えてもいました。そんな矢先、たまたま訪ねてこられたミネルヴァ書房の寺内さんにこの話をしたのが本書出版のきっかけになりました。たまたま佳代ちゃんの日記がとりあげられましたが、こういう形になった以上、子どもたちの生きた真実を理解していただき、少しでも、少年少女たちの幸せに役立てばと祈るばかりです。ミネルヴァ書房の寺内一郎さん・鈴木良一さんには深い理解とお世話をいただいたことを感謝いたします。

人は 時を止めることが

出来ない……

人は 時を戻すことも

出来ない……

人はただ 今という

私が こうして生きている中での時間を

大切に大切に

生きていかなければ……

そうしなければ 未来をよく

歩むことは出来ないだろう

そして人間は いつか

小さな ローズクのように

静かに 静かに

消えてゆくだろう

本書をお読みになる前に

本書は昭和五四年四月六日にはじまり、昭和五七年三月二三日まで続く、大
学ノート十二冊分の和田佳代子さんの日記を編集したものです。日記は病気の
時以外は必ず毎日書きつづけられています。日記は毎日辻先生のもとに手渡た
され、辻光文・須重子先生夫妻がまた必ず毎日赤ペンで数行、時には佳代子さ
んよりも沢山書きこみをされています。本書では辻先生夫妻の部分は三字下げ
にしてあります。文章・漢字は元のままです。送りがなは一部修整しました。

編集部

とまどい・目次

● 佳代ちゃんのこと

辻 光文

こ
だ
わ
り
…………… 1

と
ま
ど
い
…………… 37

ふ
れ
あ
い
…………… 81

い
さ
か
い
…………… 133

ためらい……………165

はばたき……………181

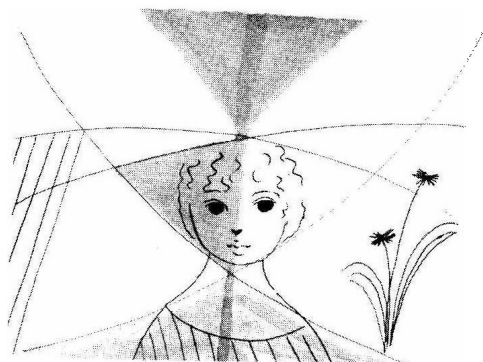
ぬくもり……………219

ときめき……………253

●装丁 鯛天成雄
●写真 鳥生龍義
●カット 星野三恵子

こ だ わ り

先生、私をむこうの西中学へ行かせて下さい。お願いし
ます。はじめは、勉強のことわからないことがあると思
います。けれどもやる気さえ出せば、二年間のくうはく
なんか、すぐとりもどせる!! ほんとに思ったんです。



今日、私はあぶやま学園という所に来た。少し不安だ。いや、かなり不安だ。ドキドキしている。この学園に来た時の第一印象しよは、「わあーきれいだなあー」。ほんとに美しかった。雲の流れがはっきりとわかる。

でももう一つの感じがうがあつた。それは「不安」ということであつた。

だれも知らない私のことをみんなはどう思うか？　でもみんないい人ばかりだからほつとした。だけどやっぱり不安はある。

この学園での初めての食事、手がふるえた。おはしの使い方もなんとなくこちない。自分でもよくわかる。キャベツについていたマヨネーズがふとしたはずみで親指についた。はずかしかった。なぜはずかしかったのかわからない。きんちようしていたからだろうか？　多分みんなが見ていたからだと思う。

もう一つの出来事は家ぞくの人たちとはなれて、今日から何日たつかわからないけれど、この学園の人達とくらす、ということ、なるべく早くむこうの学校に行けるように努力しなければ、と思っている。

佳代ちゃんも小さい時からいろいろ、さびしい思いをしたり、いろんな人に氣をつかつて小さな胸をいためた日もあつたんですね。

今はまた、ここへ来て知らない人ばかりでどんなに心が不安なことでしょう。

でもここにいる子はみんな心やさしい子ばかりだし、先生もいけないことをしない限りへんに叱ったりはしません。のびのびとくらして下さい。

学校の勉強もあなたの出来るところから教えてくれるのです。わからなかったらわかるまで教えてくれます。あなたのほかがらかな、はきはきしているところが先生はともいいな一と思っけています。それにここへ来て、ワーきいだなあ一と思ひ、雲の流れまで心にひびかせる佳代ちゃんの美しい心が、大好きです。いっぺんに好きになりました。

あと一週間ほどしたらはなちゃんをつれて面会にお母さんが来てくれるので楽しみですね。先生も楽しみに待っています。

かけがえのない、佳代ちゃんのたった一つの大切な命を、この太陽と緑と空気の美しい阿武山でいきいきとよみがえらせて、由里ちゃんのように退園していけるよう、いっしょけんめい、励んで下さい。何でも相談にのつてあげますからね。

—— 四月八日(日) ——

この間、保母先生からかしてもらった『おれの愛とまこと』という本を見て、今まで私がやってきたことはほんとうにはずかしいとつくづく思つたんです。

そこには「勇氣を持て!!」と書いてありました。この言葉で私は一瞬ドキッ!! としました……。そこで先生、相談があるんです。それは……、私むこうの「西中学校に行こう」と考えています。しんけんにこんなことを書くと「すぐくかるはずみな奴だ」と思ふかも知れませんが、ほんとにし

んけんなんです。うまいこと書けないけれど……。

でも自分では自信がついたと思っています。これまでの三日間、先生の言葉、一言一言に「ドキッ、ズキッ」と感じて……。今までの私は今の自分とくらべるとほんとに情けないと思ったんです。

先生は、私がこの学園に来た時に「今のあんたは、こけても立ちあがれず、ふりむけばウンコがついていた」と言いましたね。正直言つて腹が立ちました。「そんなに私は落ちこぼれてたんだなあ」と後で考えました……。これではいけないとほんとに考えました。

むこうの中学校へ行つた方が私には楽なんです。むこうの中学校のことを考えているとなぜか、すつきりするんです。それは何もこの生活がいやという理由でなく、ほんとにこれではいけないと思つてゐるからなんです。だから先生……、私をむこうの西中学へ行かせて下さい。お願いします。

……はじめは、勉強のことではわからないことはあると思います。けれどもやる気さえ出せば、二年間のくうはくなんか、すぐとりもどせる!! と思つたんです。ほんとに思つたんです。今は、むこうの学校へ行く自信があります。これが今の私の正直な考えです。

わかりました。しかし、昨日来て今日、急にというのは少しセカセカし過ぎます。この生活はまだ一步もスタートしていません。君が、そこまで自覚的に考えるのならそれを態度で、生活であらわしてみることです。自覚は決して頭だけの問題ではないはず。『わかりました。チャンとします』というなら、それがどこであろうとその現在おる場所でそのわかつた生活、チャンとした生活ができてゐるのではなかつたらおかしいのです。